研究課題　観世音寺公験案の集成と研究

研究経費　三七万二〇〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　森哲也(九州大学）

　所内共同研究者　稲田奈津子・遠藤基郎・山口英男

　所外共同研究者　重松敏彦（太宰府市公文書館）・三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

（１）課題の概要

　保安元（一一二〇）年、筑紫観世音寺は東大寺末寺化に伴い、八世紀代以来の伝来文書について公験案を作成して進上した。それらは東大寺図書館を始め、国立公文書館（内閣文庫）等、寺外の各所にも分蔵され、確認できる公験案は二四点を数える（一点は焼失、二点は正文）。本研究では、これら公験案二四点を集成・翻刻して広く学界の共有財産化を図るとともに、地方寺院における文書保管、資財管理の実態解明、寺領経営の再検討等、公験案としての分析を行おうとするものである。今年度（過年度の繰越分）は、これまでの成果を踏まえ、公験案の集成を完成し、伝来過程等に関する整理を行うとともに、公験案に関する基礎的考察、観世音寺の東大寺末寺化の背景等についても分析を加え、報告書を作成して本研究課題の完成を図る。

（２）研究の成果

　今年度は、本研究課題の総括として、これまでの調査･検討の成果を踏まえ報告書を作成した。中でも、現段階で知られている観世音寺公験案を集成し、史料調査の成果、共同研究員による検討、写真帳、影写本等に基づく校訂を施し、刊本、標註、参考文献、伝来過程等に関する情報を盛り込んだ「観世音寺公験案集成稿」（森編）を作成できたことが大きい。これによって、関係情報とともに公験案を一覧することが容易になり、公験案の生成～現在に至るまでを対象として叙述した「観世音寺公験案の基礎的考察」（森）と合わせ、観世音寺、大宰府、東大寺に関する研究の深化に寄与するものと考えられる。「一二世紀前半の東大寺別当と観世音寺・鎮西米－特に寛助に注目して－」（三輪）は、観世音寺の東大寺末寺化に際し、東大寺別当、特に寺外別当の果たした意義を明らかにしたもので、中世寺院へと変貌を遂げる東大寺の歩みを研究する上で重要な成果である。「補説・『観世音寺資財帳』原本ならびに同資財帳複製の調査」（森）では、時間的な制約もあったが、原本の観察によって同資財帳の様態について、これまで指摘されなかった点を確認でき、複製の調査においても、紙面の痕跡から料紙の編成について新たな可能性が指摘されるなど、今後も同資財帳に関する調査・研究を継続する必要性が示された。観世音寺現蔵の中近世文書撮影に際しても、現存未確認のため内容が判明しない公験案に関し、その手がかりとなる記述が見出されるなど、今後の研究進展につながる発見があった。  
さらに東京大学史料編纂所日本古文書ユニオンカタログデータベースの当該文書レコードから、本報告書PDFに飛べるようにすることで、より広い学術利用を可能とした。  
以上、本共同研究では、コロナ禍の中で制約をうけた部分もあったが、古代史と中世史、観世音寺と東大寺という、それぞれの視点による分析が効果を上げ、また、長年にわたる正倉院文書や東大寺文書の調査と出版により蓄積されてきた経験知が発揮されたと言えよう。